ＵＳＡ内陸部における日系人社会の成立と解体および現状

ユタ州ソルトレークを例として

Development, Dismantling and Present Conditions in Japanese-American Society : A Case in Salt Lake City, Utah U.S.A.

池田　　碩*
Ikeda Hiroshi*

［Ｉ］　はじめに

鎖国体制から開国へ、すなわち明治をむかえると、我が国の近代化は急激に進みだす。その結果欧米の文化や物質は、貿易や政治の中枢である港湾や都市域から押し寄せてきたが、一方地方の農山漁村である田舎からは、逆に発展する先進国へと、多くの出稼ぎ者や移民達を労働者として送り出すことになった。

初期は、ハワイでのサトウキビ栽培が中心であったが、徐々にアメリカ大陸の太平洋沿岸への農業・漁業移民が増加していく。特に、ハワイが1898（明治31）年アメリカ合衆国の１州へと昇格したのを機に、ハワイからの転住者も多く加わった。そのうちの一部には、さらに広大なＵＳＡの内陸部へと向かった移民達もいた。

その中に、明治期の末すでに日本人の集団としてまとまり、日本語新聞や仏教会をもつ「日本人達の街」を形成した特異なところがある。そこは、ＵＳＡでも「モルモン教団（末日聖徒イエスキリスト教会）が造りあげてきた異質な性格をもつ州と都市」として知られ、近くに銅・銀・石炭などの鉱山も多いユタUtah州のソルトレークSalt Lake市の一角である。

筆者は上記の歴史にかかわる研究とは関係なく、20年前に自身のライフワークである自然地理学・地形学のフィールドとしてロッキー山脈フロントのこの地を選定し、ユタ州立大学へ留学した。その後も、ほぼ毎年訪ねており、日系人のことやモルモン都市の歴史さらにはそれらの性格を反映する地理的地域を訪ねながら現状を考えてみることが、いつのまにかサイドワークになってしまった。

ソルトレークの「日本人街　JapaneseTown」は、大正時代を経て昭和初期に最盛期に至る

2003年９月５日原稿受理　*地理学教室　Dept of Geography

が、その後は様々な変転をたどり、第２次大戦後ソルトレーク市域の拡大発展に飲み込まれて解体消滅した（写真Ｂ－３）。その結果日系人達の大きな核は失ったが、その後の彼等の展開をじっくりとたどれば、今でも子孫達の面影をのぞくことはできる。ただし初期移民からすでに100年を越し、３～４世の世代に入っており、ほぼＵＳＡ社会へと同化し終えつつある状況である。

そこで本論では、長い歴史の中の一時とはいえ、ＵＳＡ大陸の内陸部に生じた「日本人街」の誕生から、その盛衰そして現状をユタ大学や現地で得た資料に合わせ、留学以来家族同様に接してもらってきた広島県と静岡県出身の初期移民から続く２家族がたどってこられた家族史を体験を通した具体的な例としてふまえ、モノグラフ的に報告するものである。

［Ⅱ］ 移民の時期と社会背景　　日本―ハワイ・アメリカ

Ａ．日本側の状況―そしてハワイへ

我が国からの最初の集団的出稼ぎ移住者・移民として良く知られるのは「明治元（1868）年組」と称されるハワイ王国へのサトウキビ栽培労働者で、149名が渡航したのがスタートであった。その後もハワイへの出稼ぎは続いた。

明治初期の日本経済はデフレ続きで、農産物の価格が低落し、農村は著しい不況に見舞われていた。その上、天候異変が続き、特に明治16年には旱魃、17年には西日本が暴風雨により不作となる。このため自作農は没落し、小作農が増加。さらに生活困窮者が急増したため、過剰労働者を新しい労働市場へと流動させる方策として、北海道への開拓民やハワイ移民がつのられた。このため、明治18（1885）年には、ハワイへの「官約移民」の第１回目の渡航が開始される。

当時ハワイ王国では、砂糖市場が好況で、1888（明治21）年から1891年にかけてサトウキビ農園労働者の需要が急増していた。この時、本論の事例地域として後記する静岡県の三保から最初のハワイ移民として川口源吉が出ている。その後官約移民は、９年間26回に渡り続けられ累計移民数は11,000人ほどにおよび、明治27（1894）年に終了する。その後、ハワイへは全て自由移民となる。1898（明治31）年には、ハワイがアメリカ合衆国に合併する。それに伴って、ハワイへ移住していた日本人移民も、さらなる新天地を求めアメリカの太平洋沿岸へと再移住する者が多く出た。

ハワイに関する研究は多い。しかし本論では直接かかわらないため、近年まとめられた飯田耕二郎（2003）をあげておくことにとどめる。

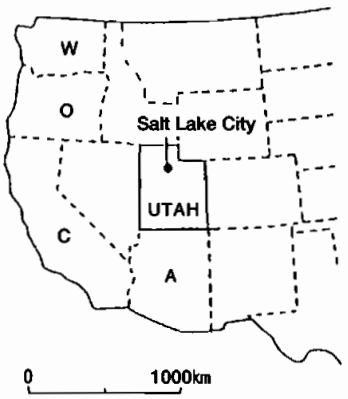


図１．ユタ州ソルトレーク市の位置
Fig1. The Location of Salt Lake City, Utah
太平洋沿岸に位置するW･O･C･Aの４州に居住していた日系人は、第２次大戦時全て各地の施設に収容された。

B．アメリカ大陸側の状況

西部へ西部へと向かってきたゴールドラッシュもカリフォルニアに至り、1852年頃にはその頂点に達していた。その後は、大陸横断鉄道の敷設が大西洋・太平洋の両側から進められ、1869（明治２）年にユタ州で結節、完成した。

この横断鉄道敷設のための大量の労働力として使用されていたのが低賃金で良く働く集団としての中国人達であった。ところがその東洋人的な性格が、ヨーロッパからの移民労働者達と同化できず、排斥の対称となってしまう。そして、ついに1880年には「中国人移民取締条約」ができ、1882年には「中国人移民入国禁止法」が成立した。しかし鉄道敷設は、各州へ向けての支線工事が進められていく時期へと移っていく。そのためには、排斥された中国人労働者の穴埋めが必要であり、そこへ入り込み出したのが日本人であった。しかも同じ東洋人であり、中国人同様の性格を持ち、集団となって働く傾向も含めほぼ同質であったため、日本人達にも排斥への気運が高まってくるのは目にみえていた。

表1．移民数の全国的位置
Graph1. The Period of Immigration and Birthplace of Immigrants by Prefecture

明治18～27年（官約移民）				明治32年～昭和7年			
順位	道府県名	累計人数	全国比	順位	道府県名	累計人数	全国比
		人	%			人	%
1	広　島	11,122	38.2	1	広　島	92,716	16.8
2	山　口	10,424	35.8	2	熊　本	61,400	11.1
3	熊　本	4,247	14.6	3	沖　縄	55,706	10.1
4	福　岡	2,180	7.5	4	福　岡	44,793	8.1
5	新　潟	514	1.8	5	山　口	42,842	7.8
6	神奈川	226	0.8	6	和歌山	28,026	5.1
7	千　葉	85	0.3	7	福　島	19,921	3.6
8	滋　賀	81	0.3	8	岡　山	19,728	3.6
9	岡　山	62	0.2	9	長　崎	17,329	3.1
10	和歌山	55	0.2	10	北海道	15,983	2.9
11	石　川	28	0.1	11	新　潟	14,393	2.6
12	鹿児島	20	0.1	12	滋　賀	12,773	2.3
13	三　重	14		13	鹿児島	11,613	2.1
14	静　岡	11		14	静　岡	7,345	1.3
15	群　馬	10		15	佐　賀	7,308	1.3
16	栃　木	2		16	愛　媛	6,863	1.2
17	東　京	2		17	兵　庫	6,328	1.1
18	宮　城			18	高　知	6,236	1.1
				19	宮　城	6,191	1.1
					その他	74,647	13.1
総　計		29,084				552,141	

外務省通商局編『旅券下付数及移民統計』（大正10年）。
拓務省拓務局編『海外移住統計』（昭和9年2月刊）。
外交史料館蔵「日本人民布哇国へ出稼一件」（出稼人名簿ノ部）。

鉄道労働者として最初の日本人集団をまとめて送り込んだのは、1881年の田中忠七であったとされるが、その後も続々と大量の労働者を供給。1897（明治30）年頃には、ほぼ中国人と日本人とが入れ替わってしまったという状況で、1900年にはすでに3,000人を超えていた。1904年―1907年頃がピークで、内陸部における日本人労働者は11,600人に達している。それに伴いいよいよ日本人労働者排斥運動も強まってくる。このため1902（明治35）年には日本政府による移民の自主規制が行われ、1908（明治41）年には、移民に関する「日米紳士協約」を締結し対応している。しかし、1924（大正13）年には「排日移民法」が制定された。

以上のように初期の事情は、我が国側の経済や社会状況、すなわち過剰労働者の押し出しが移民への要因であった。しかしそれと共にハワイでのサトウキビ農園労働者需要の急増、さらにアメリカ側太平洋沿岸周辺での農業・漁業労働者の必要性、および内陸へ向けての中国人労働者に代わる鉄道敷設・保線労働者の必要性とが連動する関係にあったことがわかる。

初期移民を年代から見ると、明治20年代には圧倒的にハワイへ。30年代にはハワイからアメリカ大陸への再渡航者が多く、40年代になるとアメリカ大陸への移住者の方が多くなった。

アメリカ・カリフォルニア州の日系人労働者たちは1910（明治43）年—20年代前半に全盛期をむかえている。

一方ハワイのサトウキビ栽培は、長期におよぶがそのピークは1930（昭和５）年で、それにかかわる労働者の40%が日系人達であった。

［Ⅲ］ 内陸部での展開　ユタ州　ソルトレーク

内陸部ユタ州進出への大きな要因には、まず大陸横断鉄道が州北西部のプロモントリーPromontoryで、1869（明治２）年５月10日に連結されたことにかかわっている。ただし丁度そのころ、岩倉具視一行が欧米視察の途時、明治５（1872）年12月26日にこの地を訪れている。しかしソルトレーク市を正式に訪問したのではなく、豪雪で列車が不通となり、開通待ちのため１月14日まで20日間も足止めされたのである。この時の記録は残されているが、日本人に関するものはなくまだ定住者は居なかったようである。ところでそれまで鉄道工事に携わってきたのは多くの中国人労働者であったが、彼等が排斥された後も鉄道の敷設は各州･各地方へ向かう支線の工事が続き、代替労働者として同じ東洋人でこの時期に移民送出気運が高まってきだした日本人が投入されたからである。さらに、1906（明治39）年４月にサンフランシスコで、大地震が発生、市街が壊滅的状況となったこと。地震の余震が続いたため混乱を避けるだけではなく、元来カリフォルニアや太平洋沿岸には、日本からの多くの農漁村出身の移民は身近な作業ができ、広大な農地を有するカリフォルニアへと進出していた者の中からも、この機に鉄道敷設が続き保安工事などの仕事の多い内陸へ、そしてさらなる新天地へと目指す者が増加したことによる。

すでにサンフランシスコにあった「日本人勧業社」にシュガビート業者から誘地を受け、ユタ州北部からアイダホ州にかけて農業労働者として送られ定着していた人々もあった。さらに先行して鉄道関連工事に従事していた者のうちには、鉄道輸送が可能となって発展しだした内陸部の石炭・銅・銀・鉄などの鉱山開発へ、より良い労賃に引かれてユタ・アイダホ・モンタナ州などへと進出していく者も出ていた。特にソルトレーク市郊外では、ビンガムBingham鉱山を中心とする銅の採

表2. ユタ州における日系社会確立期の人口とその構成（人口,センサスより）
Graph2. The Growth and Decline of Population in Utah State Japanese and Japanese Americans (U.S.Census)

年　号	1世	2世	男	女	計	増減
1880(明治13)					0	
1890(明治23)					4	＋　4
1900(明治33)	417	0	406	11	417	＋ 413
1910(明治43)	2062	48	2021	89	2110	＋1693
1920(大正 9)	2359	577	2174	762	2936	＋ 826
1930(昭和 5)	1730	1539	2056	1213	3269	＋ 333
1940(昭和15)	829	1381	1263	947	2210	－1058

掘と製錬が1903（明治36）年からユタカッパー会社Utah Copper Companyの設立によって本格的に始まり、大量の労働者が求められたことが大きい。すでに6年後には日本人労働者たちの集団キャンプが成立し、数人のボスのもとで、約650人が働いていた。このうちのボスの一人が、後述する広島県出身の佐古大師郎氏で、出稼ぎ労働者としてハワイへ、さらにアメリカへと転向し、成功した家族の例である。

鉱山開発は世界経済の動向に左右されがちで、第1次大戦1914（大正3）から18年の後には一端下向する。その一方で日本人労働者の中から余裕が出てきた者は、この地でシュガービートやポテト農業自営者へと転向する者が出だした。つまり内陸山間部のこの地には、明治の中頃から末にかけて単身で鉄道関連の出稼ぎ労働者から身を起こし、鉱山労働者等を経てしだいに農業従事者となり、自営移民として定着しだす者が急速に増加した。

その状況を人口センサスによるユタ州内における日系人の動勢（表2）を10年単位でながめてみよう。1890（明治23）年にわずか4名であったのが、1900（明治33）年には417名へ。さらに1910（明治43）年には2110名に達していること、しかも男･女の比率を見ると男が2021名であるのに対し女はわずか89名に過ぎないことも当時の移民社会の状況を明瞭に示している。

その結果、日本人労働者へのサービスや情報交換の場の必要性が生じ、ソルトレーク市街中心部の一角に日本人達の「ゲットー」と称されるたまり場ができだし、そこを中心に日本人「街」が形成されてきた。

日本人「街」が形成されると移民急増期ということもあり、さらなる集団的組織も出現しだす。1901（明治34）年には「ソルトレーク日本人会」が、1907（明治40）年には「ユタ州日本人会」が、さらに同年に日本語新聞「絡機時報（ロッキータイムズ）」が、1912（明治45）年には「仏教会」等が次々に設立されている。この機に日系人増加率が最大を示したのである。

急増期は過ぎたが、1920（大正9）年には2936名。1930（昭和5）年には3269名へと増加はその後も続いた。そして初期の出稼ぎ者としてこの地まで進出してきた若い男性の単身者達による社会から、人生の伴侶（妻）を求めて一時帰国したり、写真結婚や手紙結婚で花嫁を盛んに求めようとする時期がやってきた。後述する事例家族のうちの石野佐久子さんが、同郷出身の長澤金蔵氏からの求めに応じて写真結婚されたのも1932（昭和7）年であった。このため1930年代のセンサスの結果も、男･2056名に対し、女･1213名と増加していることを示す。そのような状況の元、この期の終わり頃には1世人口に対して2世の子供達が急増し、ついに両者の数が逆転したのが大きな特徴であった。そして移民達も自営を目指し、家族労働の可能な農業経営者や商店経営者への転向が多く、安定した生活基盤作りを目標とするようになった。

この期に日本人「街」もゲットー的スタートから名実共に充実した「日本人街」へと成長し、年中行事も七夕･お盆･正月等、日本同様に行われていた。しかし、好況時は長くは続かず、この頃を境に社会状勢が不安定化しだす。1920（大正10）年になると経済は不況期に入る。そのうえ1924（大正14）年には「排日移民法」が制定されるし、1927（昭和2）年には大恐慌が到来した。これらの影響はてきめんに日本人社会にも反映し、これまで増加し続けた日系人の人口は、1930（昭和5）年から1940年にかけての10年間に一挙に3分の1が減じ、2210名となって

しまった。

さらに第2次大戦により、敵対国となってしまったダメージは極めて大きかった。太平洋に臨むワシントン・オレゴン・カリフォルニア・アリゾナ4州（図1）に居住する日系人は各地に急造された収容所へと連行された。しかし、それ以外の内陸州の日系人は監視されつつも収容されることはなく、ほぼそれまで同様の生活ができた。ユタ州にもソルトレークより南西部240kmのセヴィアSevier砂漠中にトパースTopaz収容所が出現、1942－46年にかけて8130名の日系人たちが送り込まれてきた。この地の特徴はソルトレーク市や周辺地域在住の日系人と共に、モルモンの人々やモルモン教会の支援が大きかったという。収容された以外にも親戚や知人を頼ってのがれてきた人達が多くいた。

同様に戦後も、収容されていた人々のうち、一時この地に住みつく人達が多かったため、戦中・戦後を通じてユタ州の場合は人口統計では不明瞭な、または統計には表れない日系人達が急増した。しかし、それも1950年代に入る頃から落ち着いてくる。一方その頃から日系人達は、すでに1世から2世中心の社会へと移行しつつあった。そこへ1960年代に入ってソルトレーク市では都心部の再開発事業計画がもちあがった。その中に「日本人街」のほぼ全域が位置していた（写真B－3）ために、一時大混乱を招くことになった。しかし、都市の発展には逆らえず、この計画は実施されることになり、「日本人街」が位置していた部分には巨大なスポーツセンターであるソルトパレスSalt Palaceが建設された。このため、「日本人街」の住民や営業していた店は移転を余儀なくされたが、移転先で元と同業の店を営むことができた者はわずかであった。それは、日系の店がバラバラに移転しては客を集められないことにもよるが、最も大きい要因は、2世、3世達が高学歴を有して成長しており、親の店や職業を継がない者が多くなってしまっていたことによる。すでに日本人街自体が老人経営の街で、老人達のたまり場的状況になりつつあったことが大きかったという。この「日本人街」の消滅を機に日系人社会自体が解体に向かいだした。着物姿で賑わったお盆祭りもこの時以来無くなったし、その他の行事も絶えていった。さらに1907（明治40）年以来発行されてきた日本語新聞「絡機時報（ロッキータイムズ）」は、その後「ユタ日報」へと引き継がれ戦時中も監視を受けながらも発行（写真C－1）されてきたが、1991（平成3）年に老経営者の寺沢国子さんが95才で亡くなられたのを機に閉じられ、唯一の日系文化情報誌も廃刊・消滅してしまった。

［Ⅳ］ 広島県双三郡出身　佐古大師郎家の例

佐古大師郎氏は、広島県北部中国山地に位置する山間盆地三次市の東15km，双三郡萩原村（現・三良坂町）棗原（ナツメバラ）出身。父・忠兵衛、母・タマの3男4女の長男として明治11（1878）年2月5日生。山間地の農家で育ったが、当時この地方からも出稼ぎ者が出だしており、大師郎氏は明治32（1899）年21才で単身ハワイのサトウキビ栽培農園へと出国した。そのうちに、サトウキビ労働者をまとめる請負業者となったが思ったような稼ぎを得られず一時帰国する。しかし、家族の不満もあり、再度明治39（1906）年に渡航。今度は成功せねば帰国し

ないと覚悟をし、ハワイではなくアメリカ大陸へと向かってカリフォルニアへ上陸。ところが運悪く、直後の4月にサンフランシスコの街が壊滅するほどの大地震に見舞われた結果、混乱をさけて7ヶ月を過ごしたカリフォルニアを後に、内陸部での鉄道労働者となる。その間、ネバダ州のカーリンCarlin辺りでは、工事中に熊が出没するという危険な状況であったという。

しばらく働いた後、ユタ州にたどり着き、ビンガムBimgham銅鉱山（1903年創業）のユタカッパー会社Utah Copper Companyで働く。ここでは多くのギリシャ人・イタリア人・ユーゴスラビア人達からなる後発のヨーロッパ移民が集団（キャンプ）を組み働いており、彼等にまじってすでに日本人が働いていた。そこで、ハワイのサトウキビ栽培へ従事時労働者達の請負業をしていた経験を生かした。その結果1907（明治40）年の9月には、ユタカッパー会社へ労働者を送り込む日本人アーサァキャンプArthur Campのボス（主任）となる。さらに、1910（明治43）年には新たに、マグナキャンプMagna Campも設置し、その主任に日本から弟の京一氏を呼び寄せているほどの大成功を納めた。1912（明治45－大正元）年には成功者として、さらに高代さんと結婚のため一時帰国。この時のパスポート（明治45年4月11日発行）が残されている。日本人キャンプの経営も順調で、異国の地にありながら、日本の年中行事に合わせてお盆や正月、さらに天長節には餅つき大会等を開催して祝っていた写真（D－4）も残されている。

1923（大正12）年に長女桃枝誕生。1926（大正15－昭和元）年長男の明（Joe）が誕生する。さらに1929年に次男晴美、1933年に次女睦子が誕生。2男2女の6人家族となる。ところが1927（昭和2）年頃から不況となり、次第にアメリカ全体が大恐慌へと突入してしまう。その影響を受け、徐々に縮小していたキャンプも1932（昭和7）年に閉じることになった。

その後も大師郎氏は、ユタカッパー本社で、仕事をさせてもらい老後も銅山とのかかわりを大切にされ、会社からは感謝状をもらわれている。余生は銅山を眺められるソルトレーク市西方で次女睦子さん達と同居し、1963（昭和38）年に86才で死亡、この地に永眠されている。

ところで筆者の留学以来家族同様に親しくさせてもらっている一家族のうち長男の明氏は、第2次大戦末の1945年に地元のハイスクールを卒業。兵隊検査を受け入隊。ミネソタ州で日本人2世部隊として訓練を受け終戦直後の8月に終え、ＧＨＱ（連合国総司令部）所属として横浜へ上陸。敗戦後の復興作業にかかわることになる。この間には、親戚を訪ねて出身地の広島県周辺や郷里も訪ねる。

除隊後は、カリフォルニア大学で医学を学び、レントゲン技師となり、大学病院に1952年から1973年まで21年間勤務する。その後もサンタローザSantarosaのメモリアル病院Memorial Hospitalに1993年まで勤務。現在は、サンフランシスコのゴールデンゲイト近くの閑静な住宅地で奥さんと余生を楽しんですごしておられる。長女の桃枝さんも現在はサンフランシスコ在住。次女睦子さんは、ソルトレーク市に在住、詳細は次の事例家族の項に記す。次男の晴美さんは、政府の原子力関係の仕事に携わり退職、現在はアイダホ州に在住。

広島県の山村からハワイへの出稼ぎ者としてスタートし、ＵＳＡで鉄道労働者となり、さらに内陸部のビンガム鉱山で日本人キャンプを興して成功。キャンプを閉じた後はその地で余生

をすごし永眠されている。大師郎氏夫妻の4人の子供達、すなわち2世全員がＵＳＡに在住、さらにそれぞれが3世の子供と4世の孫を持たれＵＳＡ社会に完全に溶け込んでおられる日本からの移民としての成功者の好例である。

［Ｖ］ 静岡県三保市出身　石野家・長澤家の例

富士山を借景に持つ三保の雄大な砂浜海岸と松並木は、日本三景にあげられるほどすばらしい景勝地である。だが、三保村民にとって、砂浜地での半農半漁の生活は豊かではなかった。そのせいもあったのか三保村からは、明治時代日本からハワイやアメリカ大陸への出稼ぎや移民がはじまる初期から多くの出国者を出してきた。その契機となったのは、記録では明治18（1885）年ハワイへの官約移民の第1回渡航年に、この村からも川口源吉が向かったことによる。彼が明治32（1892）年に一時帰国し、多くの村民をつのり、33名を連れてアメリカ大陸へと渡っている。この年に本論で記す家族のうち石野久太郎（明治8年生）氏も渡航している。

石野は、明治32（1892）年に24才で、まずワシントン州のタコマTacomaに上陸し、鉄道労働につく。その後明治39（1906）年のサンフランシスコ大地震に遭遇、この時白人の家にボーイとして住み込み医学を勉強中で、この家の少年を助けたという。その後オークランドの病院で助手をし、さらにネバダ州のカーソンシティ Carson Cityの病院で働く。大正2年に一時帰国し、うらさんと結婚、再渡航。しばらくネバダ州のスパークスSparksで養鶏業を営む。大正5（1916）年、長女佐久子さん誕生。その後妹も誕生。大正7（1918）年子育てと教育のため母と3人で郷里の三保へ帰国。久太郎は大正11（1922）年叔父を頼ってユタ州のセラキュースSyracuceへ、さらにレイトンLaytonでポテト・シュガービート農業に就く。

長澤家の兄・寅吉（明治13年三保で生）氏は、1906年サンフランシスコ大地震の年、26才でカナダへと渡航。1年半後にはＵＳＡへ向かいオクラホマ州・コロラド州で3年半をすごし、1911（明治44）年にユタ州へ、1915年からはLaytonでポテト・シュガービートを耕作。弟の金蔵（明治34年生）氏も、1919（大正8）年に19才で渡航。兄の元へ行きしばらく同居の後独立。1930年からペイソンPeysonでセロリーを栽培成功、ナガサワセロリーの名で出荷する。

このころの三保村では、村をあげて出稼ぎ者や移民を出すのが慣習化しており542世帯から453名が外地に出ており、全世帯の75%に達する状況であった。

Laytonの同郷出身で前記石野氏と長澤氏の間で話が進められたようで、金蔵氏（32才）の元へ石野氏の長女で教育のため郷里へ帰国していた佐久子さんも東京へ出て大妻女子高を卒業したので呼び寄せ、18才の年の1932年写真結婚（本人の話）で再渡航してくる。翌1933（昭和8）年には、筆者が留学以来親戚同様に親しくしてもらってきた長男巌（Ray）氏が誕生。金蔵氏は農閑期の冬場になると「日本人街」の魚屋サンライズで手伝い的に働いていたが、1933年にサンライズを買い取り、日本人街での商店経営者となる。奥さんも店の一角に自分で饅頭など和菓子を作って古里の名を冠した食料品店「三保屋」を出す。その後子供達も4男2女となり、この地では典型的な家族労働のもとに子供の教育を行なう。第2次大戦中も営業できたので、

ソルトレーク市南西方のセヴィア砂漠中に出現したトパーズ収容所への慰問を続けた。1954年には長男の長澤巌氏と前記した佐古大師郎氏の次女睦子さんが結婚する。

1965年ソルトレーク市の都市再開発に伴って「日本人街」域は解消。この時長澤家の店は市の南郊へ移転し、食料品店も兼ねる「サンライズレストラン」へと拡大する。さらに巌氏は不動産サーヴィス業Professional Real Estate,Incを兼職される。その後、レストランは1世2世そして子供達3世も手伝いながら28年間営業される。この間に育った子供達はそれぞれ大学を卒業し専門職につき、USA諸州で働き後を継ぐ者が無く、1993年8月に閉店された。1世の父と2世の母の長男であった2.5世の巌氏も2000年に亡くなられた。その長男で芸術家のCraigにはすでに4.5世に当る孫が育っている状況である。注14）の編集者Ted Nagata氏の夫人は巌氏の妹である。夫妻の活躍については注23）に記されている。

［Ⅵ］ さいごに

我が国からの出稼ぎ者や移民達が、アメリカ大陸へ、しかも内陸部に明治末期に形成した「日本人街」に注目した。さらにその形成に至る背景や形成過程と盛衰、そして解体に至る状況と現状を、ユタ大学や現地図書館等で得た資料によってたどった。

さらに、初期移民につながる2家族がたどられてきた系譜を通して具体的な実体験から検証してみた。

現状は初期移民からすでに100年を超え、3世～4世の世代に入り、日系人・日系社会としての集団の歴史を閉じ、現在は広く国内各地へと分散しており、ＵＳＡ社会へと人も生活も文化も急速に同化し終えつつある。

この点、新しい企業の進出や常時日本からの観光客の多いロサンゼルスやサンフランシスコなどと内陸の都市とでは相違の開きが大きくなってきていることがわかった。

尚、戦後移民とは異なった型で、新たに出現した交流として1983（昭和58）年にソルトレーク市と長野県松本市との姉妹都市提携がある。松本市が選定された理由には、代表的な日系人の中に長野県出身者がおられたこと、自然的背景も内陸の山間地に位置する都市という共通点をもつということである。市の最大のイベントであるフェスティバル パイオニアデイのパレードには、この都市の市民構成や姉妹都市にかかわる各国の集団行列の中に、松本からの輿をかつぐハッピ姿の人々も登場する。さらに、1991（平成3）年に、女性経営者の寺沢国子さんのもとで95才の死亡年まで発刊されてきた「ユタ日報」の全刊号が、松本市中央図書館へ寄贈された。それをもとに図書館を中心に「ユタ日報研究会」を発足、年報もすでに9号まで発刊されている。

2002年2月にはソルトレーク市を中心に第21回冬季オリンピックが開催された。このため久しぶりに日本から多くの選手と応援団をむかえ、近隣地区に居住する2世3世達も対応にかけつけ、遠い母国となりつつある日本との交流に湧いたという。しかし今後は、このような多くの日本人が内陸のこの地まで訪れる機会は無いだろう。

今回行ったようなＵＳＡ内陸部で、しかも特有な環境の元に生じた「日本人街」の盛衰を資料と生活者達の体験を通して具体的にたどった報告は少ないようである。この報告が移民研究の一助となれば幸いである。

文献

1）山中部と日本人　大正14（1925）年　絡機時報社.ユタ州ソルトレーク.
2）TOPAZ　1942－1945.　Topaz　Museum. Delta City, Utah State.
3）R・ウィルソン　B・ホソカワ 著,猿谷 要 訳（1982）ジャパニーズ・アメリカン.　有斐閣.
4）戸上 宗賢 著（1986）ジャパニーズ・アメリカン.　ミネルヴァ書房.
5）長江 好道（1987）日系人の夜明け.　岩手日報社.
6）清水市三保におけるアメリカ移民の歴史（1977）清水市東高等学校郷土研究部　風土14号.
7）John.S.（1980）Salt Lake City. Mocormick.
8）Dick.N.Francois.C（1998）Salt Lake City. Towery Publishing.Inc.
9）R.C. Ringholz. B.Kummer（1984）Walking Through Historic Park City. Park City Library.
10）S.George Ellsworth（1981）Utah`s Heritage. Peregrine Smith Inc.
11）Salt Lake City Multi－Ethnic Center (1975) A Feasibility Planning Study. Architectural Aid Program Assist Inc.
12）The 25th Biennial Silver Anniversary Japanese American Citizens League National Convention Souvenir Booklet（1978）.
13）Salt Lake J.A.C.L 50 Years（1985）Salt Lake J.A.C.L Chapter in honor of its 50th Anniversary.
14）Japanese Americans in Utah（1996）JA Centennial Committee.
15）Asian Americans in Utah（1999）Asian American Advisory Council.
16）上坂 冬子（1985）おばあちゃんのユタ日報.　文藝春秋社.
17）ユタ日報研究－１～９号（1994～2003）松本市中央図書館.
18）アリス・カサイ著,小出栄致 訳（2003）伝統と歴史－わが夫ヘンリー・Y・カサイと日系社会.　ユタ日報研究第９号.
19）三輪 公忠 編著（1996）日米危機の起源と排日移民法.　論創社.
20）猿谷 要（1993）モルモン街道とソルトレークシティー.　週刊朝日百科.
21）池田 碩（1993）ソルトレークにおける日系人社会の成立とその解体および現状.人文地理学会大会.
22）池田 碩（2002）日本人街も進出したモルモン教の聖地・ソルトレーク.　雑誌「地理」47巻１号.
23）丸山綾子（1998）ユタ州における日系米人活動の現状・ユタ日報研究第４号.
24）久米郎武編田中彰校注（1977）特命全権大使岩倉具視「米欧回覧実記」岩波書店.
25）傳馬新報社（1910）インターマウンテン同胞発達史，コロラド州デンバー.
26）飯田耕二郎（2003）ハワイ日系人の歴史地理.　ナカニシヤ出版.

Development, Dismantling and Present Conditions in Japanese-American Society: A Case in Salt Lake City, Utah U.S.A.

by: Hiroshi Ikeda, Professor
Dept. of Geography
Nara University, Japan

When Japan came out of its self-imposed isolation in the mid-19th century, the beginning of the so called "Meiji Era", it moved rapidly to modernize itself through various contacts with Western culture and material things through trade in the nation's political centers which were its largest cities with major ports. At the same time, many young people from local farm and fishing villages were sent to the more developed countries to make money (with the sweat of their brows).

In the first period, many were sent to Hawaii to work on sugar-cane plantations. As time passed, the number that went to the American Pacific West Coast to work as farmers and fishermen increased, especially in 1898 when Hawaii acquired Statehood. Some of the immigrants went on to the more inland areas of the continental United States.

By the early 20th century, Japanese immigrants started gathering into communities (ghettoes), published Japanese-language newspapers, built Buddhist temples, and established "Japantowns". One of those developed in the home of the Mormon Church, Salt Lake City, Utah near the State's many copper, silver and coal mines.

Salt Lake's Japantown was established at the end of tke 1890's; by 1910 had a population of 2110, that by 1930 had grown to 3269. It later underwent many changes, but with the expansion of Salt Lake City after World War II, in 1965 it was dismantled. This resulted in loss of the core of the Japanese community there and dispersion of many of its people throughout the nation. However, it is still possible to find some of their descendents in the city today.

In this paper, I will briefly trace the long history of this particular inland Japantown from its beginning to its end based on information I found at the Utah University library and on-site. I will do this by following the history of two immigrant families that had their origins in Japan, one in Hiroshima Prefecture and the other in Shizuoka Prefecture . They are now 3rd and 4th generation. Japanese-Americans who neither speak Japanese nor eat Japanese food and have now (virtually) become full-fledges members of American society.

Daishiro Sako was born in Hiroshima Prefecture in 1877 and immigrated to Hawaii in 1899 to work on a sugarcane plantation there. He was unsuccessful in his first trip and returned to

Japan, but in 1906 he returned to the U.S., this time to San Francisco where he experienced the great San Francisco earthquake of 1906. He escaped the confusion moving inland to work at a steel factory. After that, he arrived in Salt Lake City and worked in the large Bingham Copper Mine. With his innate leadership abilities, he was able to organize the other Japanese mine workers into a "Japan-camp" of which he was leader. Around 1910 when work was going well, they successfully built a new Japan-camp near the old one. In the meantime, Daishiro had married and fathered two sons and two daughters. In the 1920's, the American economy started to deteriorate into the Great Depression of 1929. This had a great impact on his Japan-camp. Of all the Japanese workers, he was the only one able to stay with the company, working hard and even winning an award for his effort. He lived in the western part of Salt Lake City, in sight of the cooper mine, moving in with his daughter Mutsuko. In 1963, he passed away at the age of 86.

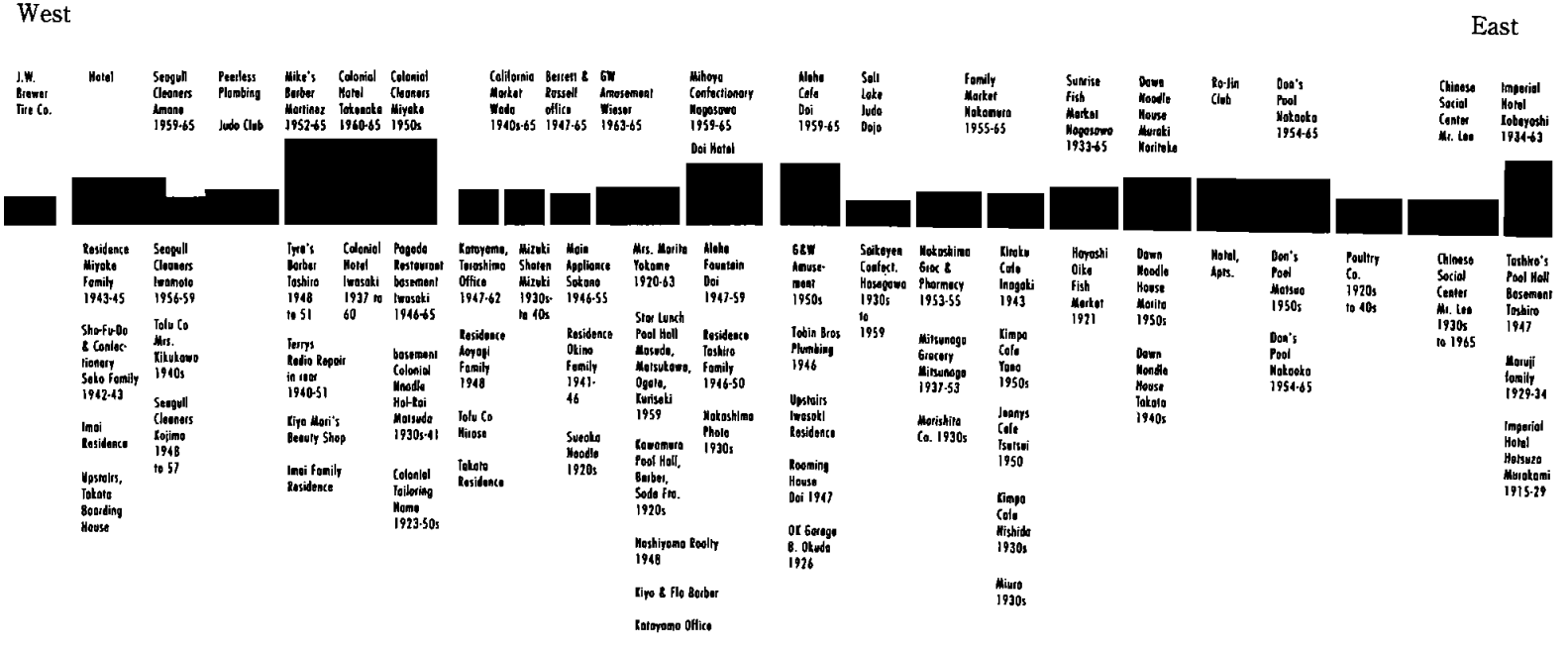
Daishiro's four children grew up and became independent. Akira, his oldest son, graduated from high school in 1945 and joined the army. Immediately after the Pacific War ended, he was sent to Japan as part of the GHQ to work in the reconstruction of his parent's home country, visiting Hiroshima, the site of the first atomic bombing. After he left the Army, he went to U.C. Berkeley where he studied at the medical school, becoming an x-ray technician and working at the U.C. Berkeley Medical School Hospital from 1952-1973. After that, he worked at the Santa Rosa Memorial Hospital until he retired in 1993. He now lives in San Francisco with his wife, enjoying his golden years.

Kyutaro Ishino was born in Shizuoka Prefecture in 1874 and immigrated to Tacoma, Washington, near Seattle in 1900. In 1906, while working as a servant for a family in San Francisco and studying medicine there, he too experienced the great San Francisco earthquake. He won praise for helping to save children during that catastrophy. After that, he moved to Carson City where he worked in a clinic, but he left and moved to Sparks where he went into the business of raising chickens. In 1913, he married, and in 1916 their eldest daughter Sakuko was born, followed soon after by another daughter. In order to raise and educate them, his wife took them back to Japan leaving Kyutaro behind. He moved to Leyton, Utah living with an uncle and becoming a potato and sugar-beet farmer there.

Torakichi Nagasawa, born in the same town in Shizuoka as Kyutaro Ishino, immigrated to the U.S. in 1906. He worked as a farmer in Oklahoma and Colorado until 1911 when he too moved to Leyton, Utah working as a potato and sugar-beet farmer and settling down there. His brother Kinzo joined him there helping him on the farm. Kinzo called Sakuko Ishino (his fiance whom he had not yet met but know of through Letters and photographs), who had by then completed her education in Japan, to join him in Leyton, and they married there in 1933.

JAPANESE TOWN

Salt Lake's Japanese-owned businesses on 100 South between West Temple and 100 West.
Top row: Existing businesses at time of demolition for Salt Palace, 1965.
Below buildings: Previous businesses. *Lower:* South side businesses.



Compiled by
Miyuki Hasegawa, Iwao Nagasawa
Mary Doi, Grace Tasaka, Ted Nagata

Around that time, farming was not so good, so Kinzo started working part-time at the Sunrise Fish Store in Japantown. He eventually bought that store and became its proprietor. His eldest son Iwao was born soon after, followed by three more sons and two daughters making a family of eight in all. Sakuko made Japanese manju cakes and sold them at the store.

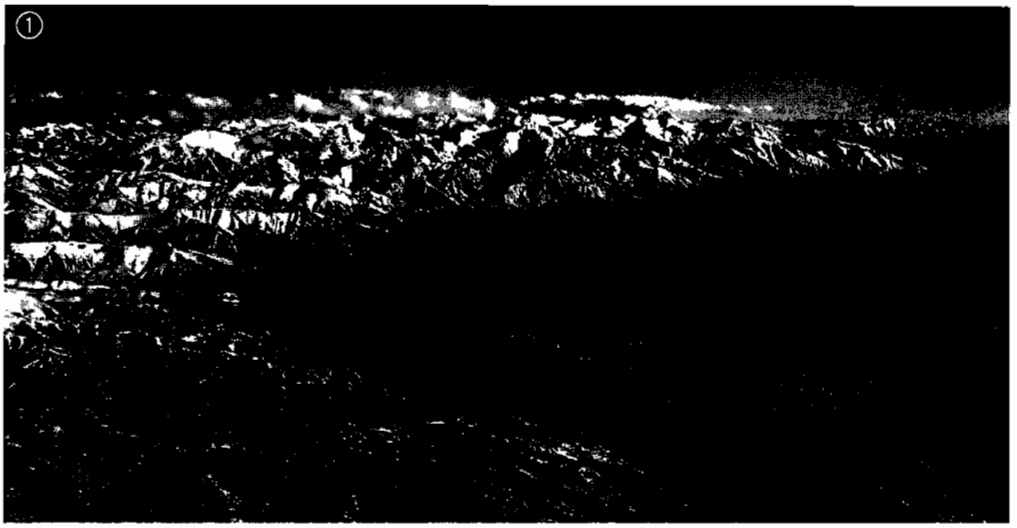
In 1954, Iwao married Mutsuko,the second daughter of Daishiro Sako, thus tying the Sako and Ishino-Nagasawa families together and they all ran the Sunrise Fish Store and Mihoya Food Store as a family enterprise in Japantown.

In 1965, almost all of Japantown found itself in a part of Salt Lake City designated for urban redevelopment, and it was subsequently torn down. With the compensation money the Nagasawa's received for their property, they opened an enlarged Sunrise Restaurant and Fish Store in a new location and ran it there for 28 years. During that time, their 3rd generation Japanese-American children were born, had all grown to adulthood, gone to college and moved away. With nobody in the family left to take over the business, the Restaurant and Fish Store was closed in August of 1993. All of the Nagasawa children have married non-Japanese mates thus speeding up their total absorption into American Society. The editer of 「Japanese Americans In Utah(1996) JA Centennial Committee. Jis Ted Nagata's wife who is the sister of Iwao Nagasawa.

In the above, I have tried to briefly trace the last 100 years of two Japanese-American families from their origins in Hiroshima and Shizuoka Prefectures in the last half of the 19th century to their immigration to the United States, marriages, children and the inter-marriages of their children making the two families relatives in-law. Their families are now in their 3rd and 4th generations in the United States, and all of them are now rapidly being absorbed into American society. This brings you up-to-date on the present condition of those two families.

I have no (kinship) relationship to those families, but 20 years ago, I spent a year based at Utah State University to do field. work on the Rocky Mountain Range as part of my profession in natural geography and geomorphology. I have gone back to that area almost every year. During those sojourns, I have taken interest in the Japanese-Americans living there, their historical relationship to that Mormon city and how it is reflected in the geography of that region, all a sub-interest of my profession as a geographer. I hope that this report might contribute something to the human geographical field of immigration studies.

A．ユタ州　ソルトレーク　Salt Lake City, Utah State



①北側上空からながめたグレートロッキー西方のワサッチ山地とグレートベースン。左下部がソルトレークシティのダウンタウン。

②③大陸横断鉄道の結節（1869年）地Promontryの記念施設。

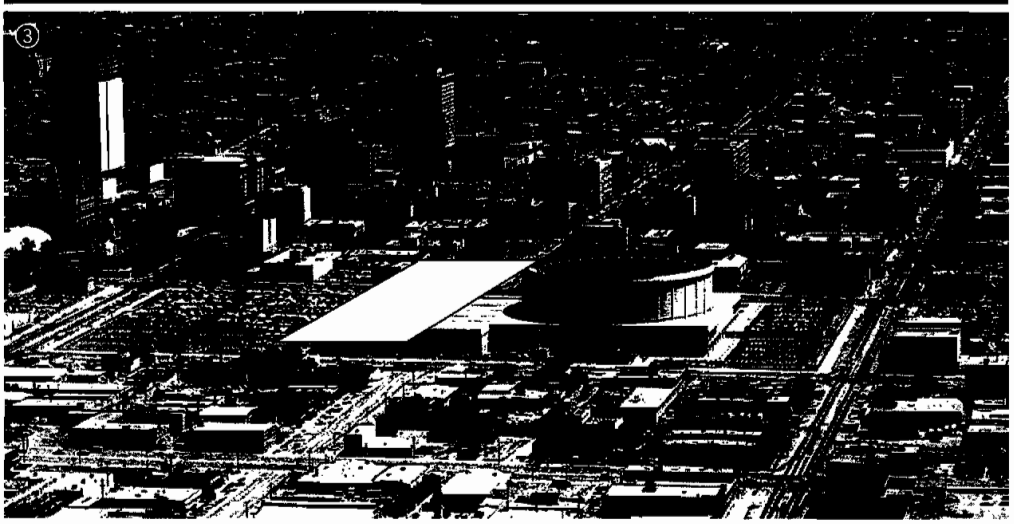
④State　Streetにかかる Eagle Gate.
Gateの奥に州庁舎。
Gateの左右はモルモン本山の施設。

B.「日本人街」の時代　Japanese Town in History

①1907（明治40）年発刊の日系人新聞「絡機（ロッキー）時報社」。

②日本人街の商店街
（解体直前の1950～60年頃）。

③都市再開発指定地区に位置していたため解体された「日本人街」のあった（白抜き）部分。左側の周辺がモルモン教本山。
建物の位置と業種・所有者の変遷は、英文中の図 Japanese Town に示す。



C.「日本人街」時代の面影　Reminders of the Past Japanese Town

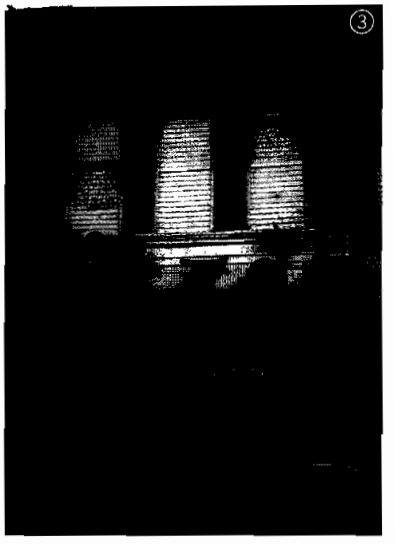
January Wednesday 1 1936

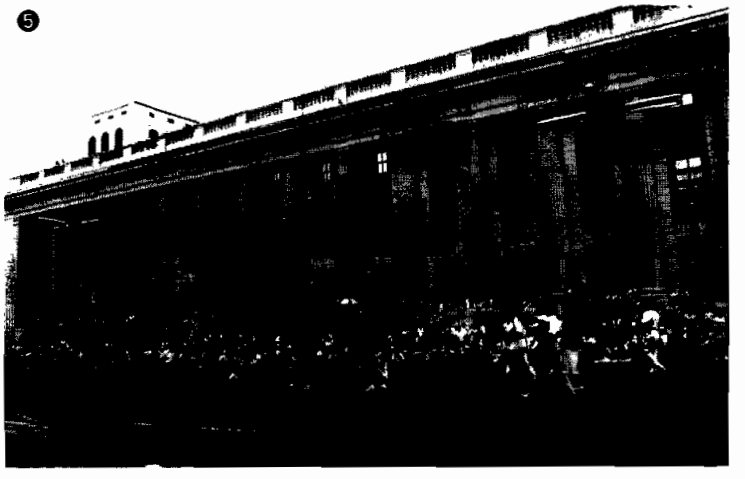
一九三六年を迎ふ

各位の一層一致協力を希望す

THE UTAH HERO

①ユタ日報は第２次大戦中も唯一発刊された日系新聞であったが、1991（平成３）年、経営者の死亡で廃刊となった。



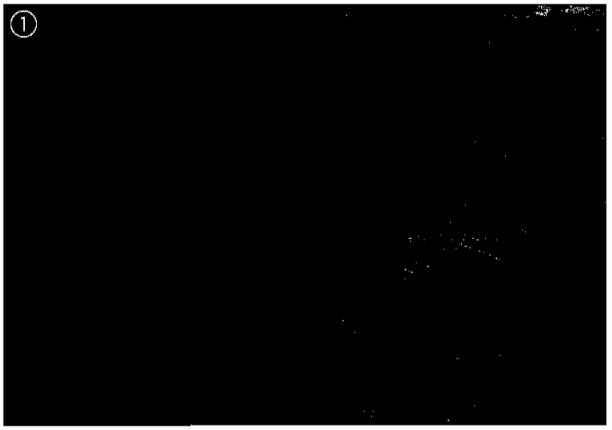


②③「日本人街」の延長部で、道路を挟んで東南側に位置していたため残り、現存するレストラン帝・ミカド。道路の右側。

④同様に西南側に位置していたため残る仏教寺院。

⑤パイオニアディ（７月24日）のパレードに出場した姉妹都市松本からの輿（ミコシ）行列。

D．広島県出身の佐古家　Sako Family, Natives of Hiroshima Prefecture

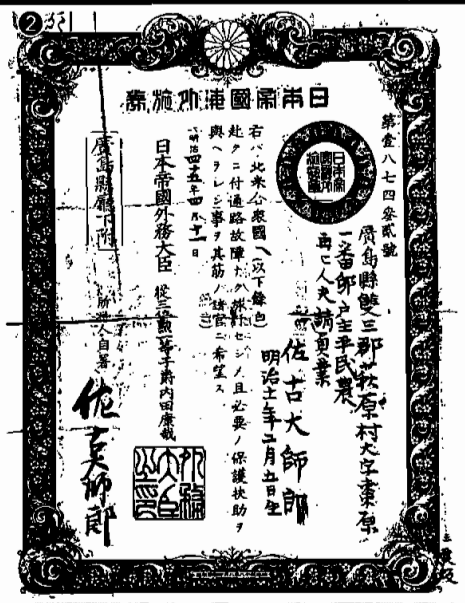


①巨大なビンガム鉱山の現状。

②明治45年USAで成功し一時帰国。再渡航時のパスポート（20cm×26cm）。職業は、再び人夫請負業と記されている。

③結婚当時の佐古大師郎とG代夫妻。

④ビンガム鉱山開発初期に佐古大師郎氏が経営していた日本人キャンプに、天長節の祝賀へ正装して集ってきた労働者たち，1915（大正4年）。



日本帝國外務大臣

佐古大師郎

E．静岡県出身の長澤家　Nagasawa Family, Natives of Shizuoka Prefecture

①「日本人街」中央部に位置していた店。Fish Groceriesのカンバンが見える。

②当時の広告。

③都市計画により南郊へ移転した後の広告。全て英語となる。

④多角的に兼業されていたことを示すカード・名刺。

⑤経営者も2.5世の巌・２世の睦子夫妻の代と変わった。

❷

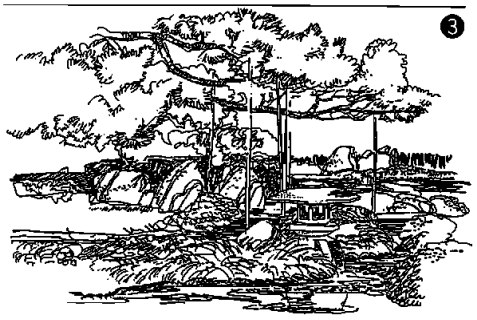
NEW SAN RISE Fish MARKET
118 W. FIRST SOUTH St.
SALT LAKE City, UTAH
Phone 40096 Home 46643

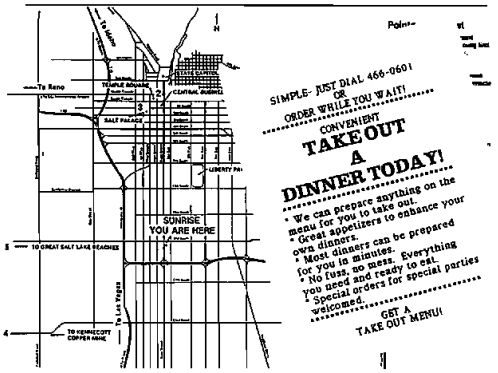
鮮魚と食料品一切
卸小賣商
新サンライス魚店
店主 長澤金藏
鹽湯市西一街南一一八番
電話 四〇〇九六 住宅四六六四三
住宅 市内エメリル街二二七番

長澤氏略歴　静岡縣清水市出身、一九一八年ユタ州の鹽湯に移住し爾來今日まで、鮮魚、日米食料雜貨品店を經營。夫人ナクとの仲に巌、米、睦、理、英子、治子の四男二女あり、物的にも家庭的にも大に富まれる。

SUNRISE RESTAURANT
2161 South State Salt Lake City, Utah 84115 Telephone 486-0601

❸





❹

SUNRISE WORLD, Inc.
2161 South State Street
Salt Lake City, Utah 84115
Tel 011-(801) 486-5513
Tokyo Ofc. 81-(03) 438-0530
International importing, exporting, consulting

PRO
PROFESSIONAL REAL ESTATE inc
801 NORTH 1400 WEST
SALT LAKE CITY, UTAH 84116
TELEPHONE (801) 322-1874

RAY I. NAGASAWA